

授業レポート(国語)～三十一文字に込められた想いを探る～

今日は、2年A組の国語の授業風景を紹介します。現在、2年生では「三十一文字の便り～近・現代短歌に挑戦～」という単元を学習しています。今回の授業では、歌人・俵万智さんの短歌を題材に、作品に込められた作者の意図や表現の工夫を読み解く「鑑賞」の学習を行いました。

授業で取り上げたのは、次の一首です。

「親は子を 育ててきたと 言うけれど 勝手に(X) 畑の(Y)」

一見シンプルですが、実は非常に奥深い構成になっています。生徒たちは、上の句が「親の言い分」であるのに対し、下の句は「子の言い分」であるという構造を捉え、対比や逆説、さらには比喩といった表現技法に注目しながら、一語一語を丁寧に読み解いていきました。

授業のハイライトは、空欄となった「X」と「Y」に入る言葉を予想する場面です。俵万智さんの独特な感性を読み解くのは難しく、最初はなかなか言葉が見つからない様子も見られましたが、授業者である後藤教諭と生徒たちとの対話が進むにつれ、思考が加速。生徒たちは、自分たちの実感を根拠にしながら、次々とユニークな予想を立てていきました。正解が明かされると、「流石はプロ」「なるほど」と、その言葉選びの鮮やかさに感嘆の声が上がりました。短歌という短い定型の中に、どれほど豊かな世界が広がっているのか、その奥深さを肌で感じる時間となりました。

今年度、本校では「生徒に学びを委ねる」ことを重点取組として掲げています。教師が一方的に正解を教えるのではなく、生徒自らが根拠を持って予想し、対話を通して納得解を見つけしていく過程を大切にしています。今後も、生徒たちが「わかった」「できた」を実感できる授業づくりを目指し、研究と実践を積み重ねていきたいと思えます。

